

クィアな欲望と身体

企画者：佐川魅恵（東京大学大学院）

話題提供者：佐々木裕子（東京大学大学院）・程斯（東京大学大学院）・佐川魅恵（東京大学大学院）

司会：清水晶子（東京大学大学院）

企画趣旨(目的)

ひとは否応無く自らの身体を生きる存在である。同時に、その身体は他者との関係のなかで自身の輪郭を形成し、認識されていく側面がある。本ラウンドテーブルでは、近代初期の女どうしの「恋愛」表象、1980年代末に登場した少年愛カセット、現代のノンバイナリーカップルの語りからの知見を出発点に、時に自らのコントロールを離れるような身体のあり方、またそれを認識することで知る欲望、それらの関係性について議論する。

話題提供

このラウンドテーブルは、以下の3つの話題提供をもとに議論を展開する。

佐々木報告は、吉屋信子『或る愚かしき者の話』（1925年）を中心に初期の吉屋作品における身体について論じる。異性愛への「帰復」を志向する主人公の、年下の女性への思慕とその破滅を描いた本作はこれまで、同性愛嫌悪や迫害の害悪への批判を書いたものとされてきた。しかしここでは身体/反応や、女どうしの身体接触に着目しつつ、吉屋における女どうしの恋愛の理想とは何と提示され、身体がそれにどのように関わっているのかを検討する。

程報告は雑誌『JUNE』が少年愛小説を基に作り出した少年愛カセットを対象に、「耳で感じるカセットブック」と銘打った「カセット JUNE」が供する身体的感応/官能を検討する。本発表は、生身の男性声優を起用した「カセット JUNE」が、単に現実の男性身体性を導入したわけではなく、むしろ声を用いて、聴き手に触覚に通ずるような聴覚的・情動的な官能を提供し、聴き手に身体の輪郭が定かではなくなるような身体感覚を与えることについて説明する。

佐川報告では、性別違和を有する者とそのパートナーの語りにおける、性の「揺らぎ」の経験に着目し、流動的な性自認が性愛関係の構築によってどのように実現しているのか、逆に二人の関係がそうした流動的な性自認をいかに可能にしているのかを考察する。そうした「揺らぎ」の経験は、ジェンダー、セクシュアリティ、身体が複雑に絡まり合いながら、主体や関係性を構築していることを描き出すものである。